●作文添削の中から

外国人留学生の書いた日本語作文の分析

―ニュージーランドの華僑の場合―

馬場　良二

熊本学園大学で非常勤をしている。学生は外国人留学生で、前期に2コマ集中で教えている。1コマは音声言語で、聞き取り、発音、1コマは書記言語で、新聞記事を読んだり、文法分析を行なったりしている。文法分析の具体的なやり方は以下のようである。作文を書かせ、そこから誤用例を集め、プリントにして、クラスワークで添削をする。自分、もしくは、自分たちが書いた日本語をみんなで客観的に見て、添削できるようになること、各自の知識を総動員して、一文ずつ、一語一句を真剣に詳細に見ていく。当たりさわりがなく、書きやすいだろうということで、毎年、「こどもの頃のこと」を書くように指示している。

今年の学生は、中国7名、韓国6名、そして、ベトナムとニュージーランドが各1名だった。ニュージーランド人といっても、生れは台湾で、ニュージーランドは5歳からだそうだ。日本には来ているのに、台湾へ帰ったことはないと言う。台湾は福建語で、福建語は、分かるけど話せな

知らない世界

ス・ジェフ

僕は五才ぐらいの時ニュージーランドに移民することになった。その時まだ五才だったから台湾のことでもあまり知らなかった。まだ純粋な僕が自分の生まれた国をあまり知らないうちに人生の新しい冒険が始まった。

実は移民する前に家族と従兄弟たちの家族と一緒にオーストリアとニュージーランドを旅行した。それで僕たちはニュージーランドにいた時、両親が突然にニュージーランドに移民することを決めた。親戚が帰った後、僕たちはニュージーランドに残って家を探すことをした。家を探すのは三週間ぐらいかかった、その三週間ずっとモーテルに泊った。家を決めた後僕たちは一回台湾に帰って学校とか家のこととか両親の仕事などを整理して完全にニュージーランドに引っ越した。

い。学園大学のニュージーランドの提携校からの交換留学生で、ニュージーランドでの専攻は日本語だ。名は徐捷 Hsu Jeff という。

日本語は世界でも珍しく、縦書きにも横書きにもなる。中国語も韓国語もかつては縦書きだったが、今では、新聞も小説も横書きばかりだ。日本語教育の世界は横書きだ。外国人用の日本語の教科書も、基本的には横書きだ。縦書きは、教えはするが、あまり使わない。英語ネイティブなのに、彼一人、縦書きで書いた。

簡単な日本語で、素直に感情、思っていることを文章にしている。表現しようとしていることは人生の重大事なのだが、それを軽やかに書いている。日本語はつたないとも言えるかもしれないが、文章は文学的だ。

ここでは、この作文を文学的に鑑賞するのではなく、語学的に分析していこうと思う。

ごく表面的なこと、表記、字の形の面から見ていく。名前の「ス・ジェフ」の「ジ」も少し「ヅ」に近いが、その次の「ニュージーランド」の「ジ」は「ジ」と「ヅ」のちょうど中間の字形となっている。「シ」の二つの点々が、傾きは「シ」のようであるが、「ツ」のように横並びになっている。また、第3画が「シ」のように下から上にはねあげてあるのか、「ツ」のように上から下へはらってあるのかはっ

僕は台湾で幼稚園を終らなかったけれど二ュージーランドに行って小学校を始めた。その時YESとNOしか知らなかった僕はニュージーランド人ばかりクラスに入った。英語がまだ分からなかった僕はクラスでずっと黙ったまま。そしてその時の僕は泣き虫だったから泣く度に校長が兄を呼んで兄がそのクラスを一緒に過してくれた。

数日後、クラスの担任が僕のラリDDYみたいな人を選んでくれた。その人は何でも手伝ってくれたからすぐ仲間になった。彼は僕がニュージーランドで最初作った友達だから今も彼のことをよく覚えている。彼との出会は知らない世界を入ったの第一歩だと思う。

今、その時の知らない世界は自分の愛して住んでいるところになった。五才の時のことは僕の人生の中で大切な変更の一つだからそのことを一生忘れないように覚えるつもりだ。

きりしない。

1枚目、本文1行目「五才」の「才」がカタカナの「オ」、同じページにある「オーストリア」の「オ」と同じである。この「オーストリア」であるが、文脈から言ってこれは「オーストラリア」の間違いである。2枚目の第2段落、「最初作った」の「初」が、コロモ偏ではなく、シメス偏になっている。

記号の書き方としては、読点「、」がマスの右上ではなく、中央に来ている。同じく記号だが、マスの中の位置ではなく、原稿用紙での位置として、1枚目の末尾から4行目の行頭に読点が来ている。これは、前の行の文末に位置すべきであるし、読点ではなくて句点であるべきだ。また、その読点の数自体、少ないようである。冒頭、「僕は五才ぐらいの時ニュージーランドに移民することになった。」も、「五才ぐらいの時」で、読点を打ちたくなる。1枚目の終わりから3行目から、「学校とか家のこととか両親の仕事などを整理して完全にニュージーランドに引っ越した。」では、「整理して」で、2枚目の1行目では、「僕は台湾で幼稚園を終らなかったけれど」で、打つのが自然だろう。「日本語教育特殊研究」の演習では、これら外国人留学生の書いた作文の誤用分析をしている。この作文を担当した学生は、読点が少ないのは英語の文章の書き方の影響だろうと言っていた。果たしてそうなのか、よくは分からない。

同じく表面的、形式的なことで、気がつくことが他にもある。2枚目の第2段落、「出会い」の送り仮名がない。国語辞典を引くと見出し語の表記は【出会(い)】であり、「出会い」でも「出会」でもよいことになっている。が、「出会」より「出会い」の方が一般的だろう。また、2枚目の第2段落の第1行、「BUDDY」というのが気になる。「兄弟」「相棒」などの意味で、ここでは「助っ人」であろうか。が、この文脈ではどの語もしっくりしない。しっくりする日本語の訳が見つからず、また、外来語として日本語に定着しているわけでもないので、「バディ」なり「バディー」なりのカタカナ表記もない、からだろう。アルファベットのつづりのまま書いている。

言いたいことが分からない、意味不明、という箇所はないだろう。が、読み間違えてしまうのが、1枚目の第2段落「親戚が帰った後、僕たちはニュージーランドに残って家を探すことをした」の「探すことをした」である。どうして、「探した」ではなく、わざわざ回りくどい「探すことをした」という言い方をしたのかと思い、聞いてみた。すると、「探すことをした」というのは「探した」の意味ではなく、「探すことにした」の間違いであることが分かった。

このような読み間違いを起こすことはないが、使い方が本来の意味、用法とずれている語に、1枚目本文4行目の「純潔」がある。多分、これは“innocent”を日本語に訳し

たのだろう。英語なら、“I was innocent”でいいのかもしれないが、日本語で「僕は純潔だった」はこの文脈にそぐわない。「おさなかった」くらいが適当だろう。

２枚目第２段落の「仲間になった」も、意味は分かるが落ち着かない。「誰かが仲間になる」という場合は、こちら側が複数で、すでにグループを作っているのでなければならないのだ。が、ここでは一人と一人とが仲良くなったことを言っているのであって、何人かのグループにもう一人が加わったというわけではない。同じ２枚目の第３段落「変更」は“change”を訳したものに違いなく、日本語にするなら「変化」の方が適切だ。

添削の際、見過ごしてしまうのが接続詞である。そもそも出来上がっている文と文とを結びつけるのが接続詞であって、それらの文が文として成り立っていると理解に困ることはなく、接続詞が少々不適切でも気がつかない。１枚目第２段落の「それで」だが、日本語の「それで」だとか「そして」だとかは、「だから」だとか「ゆえに」だとかほどではないにしても、連続する二文の間に因果関係を示してしまう。この作文の文脈では、「ニュージーランドを旅行した」、だから、「移民することを決めた」とはとれない。単に、「ニュージーランドを旅行した」、その時に、「移民することを決めた」と言いたいのだろう。そういう時、英語では“and”を使うに違いない。その訳が、「それで」なのだろう。因果関係を示さない接続詞なら、「その時」があるが、「その時」だと、「僕たちはニュージーランドにいた時」とダブってしまい、文の構造が乱れてしまう。こういう時、何もはさまない、接続詞を使わない、という選択もあるのだが、英語話者にとっては、何もはさまない、という選択はありえないものだったのかもしれない。

表記や原稿用紙の使い方、といったものではなく、もっとはっきり日本語の誤用といえそうなものを以下にあげていく。

１枚目第２段落の「突然に」。語形が似ているなら「自然に」、語義が正反対なら「緩慢に」、どちらも「に」がつく。が、「突然」には「に」がつかない。これは、同じ漢字二字の熟語であっても、「自然」と「緩慢」は形容動詞となり、連用形の活用語尾の「に」をとるが、「突然」は形容動詞としては機能せず、連用修飾語として働く際には、副詞としてこのままの語形で使われるからである。

一方、２枚目第２段落の「最初」は、「日本に来て、最初は毎日が不安だった」のように「に」なしで連用修飾をする。が、「彼は僕がニュージーランドで最初作った友達だから」の文脈では、「に」を必要とする。「に」のない「最初」だと、ある程度の幅を持った「最初の方」「最初の時期」の意味となり、一方、「彼は僕がニュージーランドで最初作った友達だから」の場合は、時期とか幅とかは関係がなく、

順番でどちらが先か、という、「点」的な用法なので「に」が必要なのだろう。

同じ漢字二字の熟語で、しかも、同じように連用修飾をするのに、「突然」は「に」があってはならず、「最初作った友達」には、「なくてはならない」。

外国人が不得意とするものの代表的な文法項目が、「てにをは」である。2枚目第1段落の「ニュージーランド人ばかりクラスに入った」。「ばかり」という副助詞に「の」を重ねるべきなのだが、助詞二つを重ねるのはやはりむずかしい。「ばかり」に直接名詞の「クラス」が続いてしまっている。同じ段落の「そのクラスを一緒に過ごしてくれた」。これだと、「クラス」というのは「授業」の意味ということになる。作文を書いた本人に確認すると、その授業だけではなく、その日一日だということなので、「クラスで」とすべきである。こうすると「クラス」は「学級」「教室」という「場所」の意味になる。

2枚目第2段落「知らない世界を入ったの第一歩だと思う」。英語で「入る」は“enter”で、この動詞は他動詞である。「～に入る」は“enter～”であり、場所を示す名詞の前に前置詞は要らない。他動詞である英語の用法をそのまま日本語に当てはめ、「世界を入った」としたのだろう。「入ったの第一歩」の「の」は、本来名詞が名詞を連体修飾するときに使われる助詞である。この場合、「入った」は「第一歩」という名詞を連体修飾しているのであるが、「入った」は名詞でなく、動詞である。動詞が名詞を連体修飾するときには、助詞の「の」は必要でなく、動詞に過去の助動詞「た」の連体形が接続した「入った」だけでこと足りる。

2枚目第1段落の「ばかり」は副助詞であるが、1枚目本文3行目の「でも」も副助詞である。副助詞というのは、目に見える何か、とか、手に触れる何かを表すのではなく、話者の心持や言語化する事象に対するニュアンスを付け加えるもので、使い方はやさしくない。そのやさしくない副助詞を使おうとする意欲は評価できる。が、ここでは、「でも」ではなく、「さえ」であろう。「まだ五歳だったから、何も分からなかった。母国の台湾のことでもよく知らなかった。」と言いたいのであるから、「でも」でかまわないはずだが、ここではそうならない。

副助詞の中でも「は」はわかりにくい。「言語化する事象に対するニュアンス」でさえなく、事象を言語化するときの話者のその事象の現実世界からの切り取り方を示しているからなのだろう。用法の基準が非常に抽象的なのである。

1枚目本文2行目の「その時」。「は」がなくても、意味は通じる。が、少し舌足らずな感じがする。

もっとはっきり訂正できるのが1枚目第2段落の「僕たちは」である。「は」は「が」でなければならない。助詞の「は」は、国文法では「係助詞」ともいわれ、「係り結び」

の「係り」の機能を果たしている。「結び」というのは「文を結ぶ」、つまり、文を終わらせることで、「は」は文末へとかかっていくのである。「僕たちはニュージーランドにいた時、両親が突然にニュージーランドに移民することを決めた」のままだと、「僕たちは」は文末、つまり、「移民することを決めた」にかかっていくことになり、言おうとする文意と食い違ってしまう。

やはり、授業でこの作文を担当した学生の指摘だが、最後の段落にある、「自分の愛してすんでいるところ」は誤りだと言う。多分、英語の“my loving home”のことで、日本語に訳すなら「愛するふるさと」となる、と言う。指摘されるとなるほどそのとおりだが、できあがった文章を見ている限り、「自分の愛してすんでいるところ」は、多少バタ臭く翻訳調だが、それがかえって、文学的な感じ、印象を与える気もする。私だったら、添削、訂正はしないだろう。

本文末「覚える」。「覚える」は覚えていない状態から覚えている状態への変化を表し、一回限りの動作を意味する。一方、英語の“remember”は“be remembering”とせずとも覚えている状態を示す。何かを「覚えている」ことは“remember”であって、“be remembering”とはならない。ここでは、覚えていない状態から覚えている状態へ移行するつもりだ、と言っているのではなく、覚えている状態を継続していくつもりだと言っているのであり、「覚えている」でなくてはいけない。

「僕は五才ぐらいの時ニュージーランドに移民することになった」で、文章がはじまる。著者の新しい人生もこの時はじまった。英文でなら、「私はまだ五才だったから」、「私はあまり知らなかった」と、主語が繰り返されるのだろうが、そうしていない。第2段落の「実は移民する前に家族と従兄弟たちの家族と」の「家族」は、英語だったら“my family”のはずだが、「私の家族」とはしていない。日本語では、文脈から理解可能であるときは、「私」とか「あなた」、「彼」などは言語化しない、あるいは、言語化してはいけない。文脈から分かるはずの「私」を言語化すると、わざわざ言い表したことによって、思い入れや特別なニュアンスが加わってしまう。かなり高度な技術だと思うが、この文章を書いた留学生は、英語では言語化しなくてはいけない“my”とか“he”とかを日本語では言わないという術を身につけているのである。

誤用分析の材料を集めるために作文を書いてもらった。思いがけず、人生の一大事を文章にしてくれた。すばらしくよくかけた一文だと思う。